

**相手意識や目的意識をもちながら、積極的にコミュニケーションを図ろうとする子ども**

— 小学6年 「伝えよう Japan ～ Lesson 1 Do you have “a” ? ～」 の実践から —

**1 単元のねらい**

アルファベットの小文字を活用し、修学旅行で見学してきたことをリーフレットにして外国の人に伝える。そして最後はクラスの一冊の“JAPAN”辞書としてまとめる。自分の作成したいリーフレットの言葉を“Do you have～?”を使って英語でのやり取りをし作成していくことで、アルファベットの小文字と“Do you have～?”を使って積極的にコミュニケーションをしようとする。

**2 授業の構想**

**(1) 子どものとらえについて**

以下に示すふりかえりは、児童Aが5年生の時に外国の方に「松江のおすすめの場所」を“I like ～.”を使って伝えたものである。

私は、アメリカの方とキューバの方に松江のよさを紹介しました。質問もしました。とても分かりやすく説明できたと思います。きんちょうするかと思ったら、ほとんどきんちょうしませんでした。今回のおかげでわたしの人見知りになおったかも! ? (児童A)

単元が始まる時、外国の人を目の前にして話ができるかどうか不安であった児童Aが、活動を重ねるたびに松江のことを伝えようとする気持ちを高めていった。そして、英語を使って相手に伝えることができたという状況であり、自分自身を見つめることができた一例である。単元の終末で行うコミュニケーション活動は、慣れ親しみの活動によって支えられている。慣れ親しみの活動を十分に行っていくことは、コミュニケーション活動の成功体験を支える。そのため子どもがもっとやってみたいと思うような活動の工夫や、教材の工夫、提示の工夫は、学び続けようとする授業を構想していくために大切である。

単元の終末を意識しながら、一人一人が目的意識をもち、次時に向けての課題を明確にしながら活動を行う。その手立てとして、ふりかえりパスポートを活用し、めあてを明確にし、1時間の活動を行った自分を見つめて次の時間へ繋げていきたい。そして、指導者は児童のふりかえりを点検・分析することで一人一人がどのような考えなのか、児童の思いを把握していく手立てとした。以下のふりかえりは、指導者が次時の授業に生かした一例である。

今日の外国語のめあては月の英語の言い方に慣れることでした。わたしは前と違ってずい分できるようになりました。まだしっかりと覚えているのでもう少し慣れが必要です。多分最初にJがついている月がだめです。ゲームをしていたときも順番がまったく違っていました。10月と8月が逆だったのもう少し慣れたいです。(児童B)

これは、単元の終末に行うコミュニケーション活動「友だちの誕生日を聞く」ために次時に向けて問いをもち追求する姿であると考え。指導者がめあてを明示し、その目標への成長を子どもが実感できる評価の工夫も手立てとして不可欠である。

**(2) 本単元の内容と外国語活動・英語科で考える問いをもち追求する姿との関わりについて**

昨年度、児童は“Hi, friends! 1 Lesson 4”「松江のよさを外国の方に伝えよう」の単元におい

て、外国の方に松江のよさを“I like～.”を使って英語で伝える活動を行った。本単元の終末では外国の方へ日本のことを伝える。伝える内容が松江から日本へ広がる。自分たちが修学旅行で学んできたことを小文字を使ってリーフレットを作成する。文字を扱うことで昨年度よりも難しくなるが、伝えたい相手が久しぶりに再会する外国の方ということで意欲をもち活動が行えると考える。そして、“Hi, friends! 1 Lesson 6”「6年生にメッセージを送ろう」の単元とも繋げている。この活動ではアルファベットの大文字を並べ6年生へ“NICE!”などのメッセージを送った。一人一人が相手のことを考えてアルファベットでメッセージを送ったこの活動は心温まる時間となった。自分が欲しいアルファベットは指導者からもらう活動であったが、今回は友だちどうしで行う。このように、相手や目的が変わっても今までの活動を土台にして活動を仕組むことで、子どもたちは見通しと意欲をもちコミュニケーション活動に取り組むことができるであろう。また、6年生になり社会科では歴史を学習している。奈良や京都の歴史の学習も合わせながらリーフレットに活用したい。国語科では「わたしが修学旅行で最も印象に残ったのはこの場面!」という単元で、伝えたいことが相手により明確に伝わるように、内容や話し方を工夫しながら話す活動を行っている。様々な教科と関連させて外国語活動の単元を構成していくことは、より深まりのある活動を行うことができると考える。

**(3) 本単元の内容における問いをもち追求する姿を育成するための具体的な手立て等について**

本単元は5時間の構成とした。“Hi, friends! 2”のテキストを参考にして単元を構成する。本単元の使用表現は“Do you have～?”とアルファベットの小文字である。“Hi, friends! 2”のテキストを身の回りの活動に置き換えてみることで、より活動に関心・興味を抱いて学び続けようとするであろう。そしてコミュニケーション活動に必然性をもたすために、一人一人の伝えたい単語のアルファベットをバラバラに封筒に入れておく。その際いくつかのアルファベットを意図的に抜いておく。並べてみると伝えたい単語にならないので、自分が表したい単語になるように欲しいアルファベットの小文字カードを“Do you have～?”を使って集めて完成させる活動を行う。そのため、一人一人がどんな単語を選んでいるのか、何を伝えたいのか指導者は把握しておき、一人一人に合わせた活動を仕組む手だてを行いたい。そして、伝えたい言葉の中に相手意識をもち、児童が思いを込めて日本の文化や歴史の中心である京都や奈良のことを積極的に伝えてほしいと考える。今回小学校で行うアルファベットの認識を1年後の中学校での学習技能の「書くこと」「読むこと」へ繋げていきたい。

**3 展開計画 (全5時間)**

次	主な学習	時	具体的な学習・内容
1	・世界には様々な文字があることに気づき、修学旅行で見学した京都や奈良の場所の英語での言い方を知ろう。	1	・ビデオレターを見て修学旅行で見学したことを外国の人へ紹介するという活動の見通しをもち、見学地の英語での言い方を知る。 ・音声教材で世界には様々な文字があることに気づき、アルファベットの小文字を知る
2	・アルファベットの小文字とその読み方を一致させ、あるものをもっているかどうかを尋ねたり答えたりする表現を言ったり聞いたりしよう。	2	・アルファベットの歌を歌う。 ・ミッシングゲーム・アルファベットラッキーゲーム・アルファベット伝言ゲームをする。
		3	・アルファベットの歌を歌う。 ・持っているアルファベットは何でしょうゲームをする。
	・積極的にアルファベットの小文字を読み、あるものをもっているかどうか尋ねたり答えたりしよう。	4	・アルファベット見付けをする。 ・アルファベットの歌を歌う。 ・アルファベットツリーの読み聞かせを聞きアルファベットパズルをする。 ・アルファベットを並び替えてリーフレットを作成する。

3	・外国の人に修学旅行で見学してきた京都や奈良のことを伝えよう。	5	・今まで考えてきたよりよい伝え合いを大切にしながら、京都や奈良のことを紹介する。
---	---------------------------------	---	--

#### 4 授業の実際

##### (1) 相手意識と目的意識のつながりから活動に深まりをもたせる

本単元は5年生時に行った単元と関連させている。「2 授業の構想」「(2) 本単元の内容と外国語活動・英語科で考える問いをもち追求する姿との関わりについて」で述べているように単元と単元をつなげることで活動に深まりが出た。ここでは、「伝えたい」「よりよく伝えたい」という思いを高めることができた。5年生時は身近な松江のよさを“I like～.”を使って伝える活動を、そして6年生時にはアルファベットの小文字を使ってリーフレットを作成して紹介し、全員のリーフレットを一冊の本にまとめ辞書をプレゼントするという活動を年間計画に位置付けた。相手は同じであるが、伝える内容は松江から日本へ広がる。一年経って再会できる喜びの中に、一年前と違った成長した姿を見せて欲しいという指導者の願いがあったが、単元と単元をつなげることで子どもも相手意識、目的意識をはっきりともち活動が充実できた。

##### (2) 学校行事や他教科と関連させる

4月の半ばに2泊3日の修学旅行を学校行事として行っている。京都や奈良について学習し、2日目に行われる班の活動は自分たちが見学地の計画、時間配分もすべて行い実行する活動である。事前学習は5年生3学期から徐々に行われ、子どもたちは修学旅行に思いを膨らませていた。国語科の学習では「はなすこと 聞くこと」の領域で5年生や保護者の方に修学旅行の思い出を語る単元を設定し行った。伝えようとする事柄をしっかり相手に伝えるためにどのように具体物を使えばよいか考える力や、相手意識をもって、より分かりやすく伝わる方法を判断する力、場面や状況に応じてコミュニケーションを図ろうとする力などを身に付けることを目的としている点は、まさに外国語活動と重なる。国語科で行っている活動と平行させることで、より活動が深まると考えた。このように、学校の行事や他教科との関連を図ることで、活動が深まる。国語科で活動していることが外国語活動に生かされ、外国語活動で活動したことも国語科に生かされる。

##### (3) 単元の見通しや外国語活動の先にあるものを見通す

###### ① 単元のゴールのコミュニケーション活動の見通し

昨年度松江のよさを紹介した外国の方々に再度来校してもらい、今度は修学旅行で見学してきた日本のよさを伝える。作成したリーフレットを6人分コピーして一冊の日本辞書としてプレゼントするという活動の見通しをもてるようにした。このことは、子どもたちに修学旅行に行く前に知らせておいた。“Hi, friends 2 Lesson1”のアルファベットの小文字を使って紹介することを年度当初の外国語活動の時に知らせることで単元のゴールの見通しをもてるようにした。

また、この単元は5年生時に行った単元とも関連している。“Hi, friends 1 Lesson 6”のアルファベットの大文字を扱う単元では、欲しいアルファベットの大文字を集め、卒業していく6年生にメッセージを送る活動を行っている。例えば“GOOD READER”と大文字を集めて画用紙に貼り、絵を描いたり写真を貼ったりして、なぜ“GOOD READER”であるのか日本語で説明を書いたものを、一人一人が6年生に手渡すという活動である(図1)。子どもたちは、その時の活動のイメージをもっていたので、今度はアルファ



図1：5年生時の活動の様子

ベットの大文字の代わりに小文字で感じたことを伝えるのだという活動の見通しを容易にもてたようである。また、今度は松江から日本へ範囲を広げた。いつも生活している松江の地ではないので、修学旅行でしっかりと学習しなければ紹介できないという状況をつくり、活動の見通しをもてるようにした。そして、事前に単元の終末で示す作成物も見せることで何をしたらよいか見通しをもてるようにした。

また、相手意識、目的意識を自然な形でもてるようにするために、外国の方からのビデオレターを作成した。「京都や奈良に行ったことを教えて欲しいな」という内容や「まだ一度も行ったことがないから、おすすめの地を教えてね」といった内容をビデオレターにして子どもたちに知らせた。たまたま留学生の会で修学旅行のことを知り、ビデオレターで伝えたいとお願いされて・・・という設定で行った。子どもたちはビデオレターを見て久しぶりに見る外国の方々に歓声をあげた。「今度いつ来るの?」「前みたいに伝えるの?」「どうやって?」「去年のままでは良くないし、成長した姿を見せないと」など、口々に言っていた。このような場面設定を6年生初めの外国語活動の時間に行うことで、単元の見通しをもった子どもたちは、修学旅行の見学にも新たな目的をもち活動していた。

###### ② 活動の工夫を行い、外国語活動の先にあるものを見通す

学習指導要領に示されているとおり、外国語活動で行われる活動は、中学校以降の学習につながるものである。日本語でも英語でも言葉のもつ意味の多様性があることに気付き、言葉のもつおもしろさに気が付いて中学校英語へつなげていくためには小学校の指導者も外国語の先にあるものを見通しておく必要がある。この単元ではアルファベットの文字を扱う。アルファベットは集まると単語になり、単語が集まると文になる。文になるとより相手に伝わるパワーになる。中学校では文法を習い、より相手に伝わるような学習をすることを伝えた。ただメッセージをこめるのではなく活動の中に組み込んだ。レオ=レオニ作“the alphabet tree”である。この絵本の内容は、アルファベットが仲よく木の葉っぱで暮らしていた。しかし、有る日強い風が吹いてアルファベットがとばされてしまう。怖くなったアルファベットたちはみんな集まってふるえていた。そこへ虫がやってきて、みんなで力を合わせれば大丈夫だと声をかける。言葉を作って仲間を増やしていくアルファベットたち。アルファベットが集まり様々な単語になる。“good”や“peace”など様々な単語が木の葉に集いだし、風に吹き飛ばされなくなった。そこへ、青虫がやってくる。単語を1つ1つ背中に乗せて文を作り“To the President, said the caterpillar!”伝えた内容は・・・“peace on earth and goodwill toward all men”このレオ=レオニの本には日本語訳の「あいうえおのき」という本がある。副題は「ちからをあわせたもじたちのおはなし」である。日本語訳は谷川俊太郎氏である。この青虫が伝えた日本語訳は「ちきゅうにへいわをすべてのひとびとにやさしさをせんそうはもうまっぴら」である。1年前の大文字を扱う単元では、このアルファベットツリーの絵本を途中まで読み、アルファベットパズルを行った。1文字を2つに切ったカードをランダムに配り、ペアを見つけて文字を1つにする活動である。今回は大文字と小文字をマッチングさせる活動を行った。そして、最後に絵本の終末部分をALTの先生に読んでもらい、指導者が谷川俊太郎さんの訳を読んだ。「アルファベットは集まると単語になり、単語が集まると文になる。言葉には力がこもる。言葉は人を傷つけるものではない。人を温かくするもの。言葉はそうやって使って欲しい。」と子どもたちに投げかけた。するとこのような児童のふりかえりがあった。

ぼくは今単語で話をするけど、文にしようとする「接続語」なんか英語であるんだろうなあと思いました。その場合は組み合わせないといけないんだなあと思いました。(児童C)

文法が心に浮かんだのであろう。文と文をつなぐ何かがあると先を見通したふりかえりである。

また、以下のふりかえりは今回の活動から中学校の外国語科へ向けた思いである。

「伝えよう JAPAN!」では自分で作ったリーフレットを使って目で見たり、笑顔で京都映画村のからくり屋敷のよいところを伝えられて喜んでくれたのでうれしかったです。これからもっと英語を勉強してまた「伝えよう JAPAN!」で来てくれた人に会えたらいいなあと思いました。そして、その時はもっとレベルアップした英語を聞いてもらいたいです。(児童D)

### (3) 追求する姿を育成するための具体的な活動について

この単元の使用表現は“Do you have ~?”である。第4時の活動では、一人一人の作成した単語をばらばらのアルファベットの状態にして封筒に入れておいた(図2)。ただし、“Do you have ~?”と聞き合う必然性が生まれるために、アルファベットを2枚抜き、並べられない状態にしておく(図3)。抜かれたアルファベットを使用表現を使って文字完成をさせるために探し合う活動を行った(図4)。何度も“Do you have ~?”を使う活動を行うことで無理なくアルファベットをインプットすることができた。また、この活動は小学生段階の文字指導において文字を形として認識し「書くこと」「読むこと」への無理のない活動であったと考える。



図2：封筒に入っているアルファベットを並べるが2文字足りない

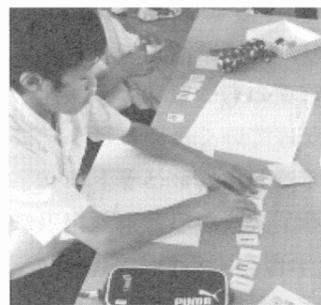


図3：



図4：足りないアルファベットを集める

### (4) 積極的にまた主体的な活動を行うための評価について

#### ① 中間評価を取り入れる

4人の外国の方とのやり取りを行う。2人の外国の方との紹介を終えた後一度全員で集まり、中間ふりかえりを行った。

T : 久しぶりに再会して自分の伝えたい日本のことを上手に伝えることができましたか?  
児童E : 前もやっているけど、やっぱり緊張します。Fさんは指さしながらゆっくり話していたのがすごいなあと思いました。  
児童F : 領きながら聞いてくれたことがとてもうれしかったです。京都のことを質問されたけど少しとまどってしまいました。日本語でもゆっくり相手に伝わっているかどうか確かめながら話を進めたいです。

5人のグループを組み、一人ずつ紹介し合う中で、友だちの紹介の仕方のよさや自分の課題について発表し合い共有した。

T : あと2人の方に紹介するけど、自分の次の課題が見つかったかな?  
児童G : 顔を見ながら話せてないので今度の紹介の時は顔を見ながら話したいです。ジェスチャーもつけたいです。さすがに外国の方はジェスチャーがうまいです。

ここでさらに「積極的に外国の方に紹介する」の「積極的に」の部分の具体を示し後半の活動を行った(図5)。



図5：外国の方に紹介する様子

T : 4人目の外国の方に日本のよいところをしっかりと紹介ができましたか?

児童H : 去年もやっていたので今年はさらに英語を使ってみようと思って使える英語は使ってみたけど、まだ、難しいです。

児童I : 今日はいいよ伝える日で、外国の人に伝えることができました。ジェスチャーを入れながらしっかりと伝えました。2回目3回目とだんだんうまくなって、しっかりと伝えられることができたと思います。

子どもたちは、外国の方にグループで紹介し合うことで、同じグループの友だちのことを知り自分のことを知ってもらったりして、相互理解を深めていた。中間ふりかえりを行うことでよい点や課題面を共有し、後半の活動の質があがった。1回だけの紹介で終わるのではなく、グループを設定し4回繰り返して行うことで自信をもって活動を行い、児童Fのような感想が出てくる。中間ふりかえりを次の活動に生かし、ジェスチャーも入れて活動したことが伺える。

#### ② ふりかえりシート(図6)の工夫

昨年度は年度当初にふりかえりシートを1冊の本にして毎時間ふりかえりに使用した。しかし1単元の子どもの変容を見ることができなかった。より児童のふりかえりを把握するために本年度は様式を変更した。パスポートの形式は変えず、シートの内容を単元ごとに蓄積していくことにした。その単元の独自の視点を追加し、めあてにそって1時間がどうであったか、最終ゴールを意識しながら、視点を明確にして記述することで、次へのめあてが明確になり、確かなふりかえりとなった。単元が1枚で見通せることで欄にしっかりと書くようになった。ふりかえりカードの工夫を行う事で児童一人一人が感じている思いや課題が明確になり、指導者も支援を明確にして取り組めるようになった。



図6：附属小学校ふりかえりパスポート

### 5 おわりに

外国語活動には気付きの観点がある。子どもたちは今回の単元を通して伝えたい言葉から「言葉っておもしろい」と感じる事ができた。同じ清水寺でも、見る人で感じ方が違う。清水寺一つとっても“beautiful” “nice view” “very tall” “strong” など多様であった。それぞれの理由を聞くと、なるほどと思うものばかりであった。“strong”では「清水寺の景色がきれいに見られるのは骨組みのおかげだ。ねじも使っていない。しかもとても細かくきれいに作られている。力強さを感じる。あとあんなに人がいるのに崩れないのがすごい。」という理由であった。建造物を細部にわたって観察し、そのらしさの言葉で理由が語られている。清水寺1つでも英語で多様に表すことができることを知ることができた。人の感じ方の多様さやたくさんの単語に活動を通して触れることは、小学校の高学年の時期には中学校への英語科に繋げる大切な活動であると考えられる。また、今回行ったような文字導入の活動の工夫については次時指導要領でも導入されてくる。よりよい文字指導の活動の在り方を模索していく一つでもある。

今回の授業を通して子どもたちが相手意識、目的意識をもち続けながら単元の見通し、1時間の見通し、さらに外国語活動にある先のものを見通すことは、主体的な活動を行うためになくはない。もちろん、教師の見通しはさらにもっと幅広く、他教科との関連、行事との関連、年間計画の見通し、単元と単元との関連の見通し、中学校とのカリキュラムの関連、教材の見通し、活動を通して子どもたちの様子を見通すことは必然である。そのためには“Hi, friends!”をきちんと行い言語機能や言語材料を把握し、その学校にあった“Hi, friends!”の単元を作成したり、年間カリキュラムの作成が必然である。最後に、5年生時と6年生時で行った外国の方への紹介は中学校の活動へとつながる。言葉で人と人がつながる楽しさを体験した子どもたちが、中学校でどのように変容していくかが楽しみである。

(文責 加藤 君江)